青森県立美術館 コレクション展 2019-4

WHAT COLOR IS THE "LOCAL COLOR"?
PHOTOGRAPHER MUKAI HIROSHI AND HIS CONTEMPORARIES

会期
2019年
12月21日
（土）
↓
2020年
3月15日
（日）

開館時間
9:30—17:00

会場
青森県立美術館

休館日
2019年12月27−31日
2020年 1月1・14・27日
2月~~10~~・25日 13・14
3月9日

入場料
一般 510円
高校生・大学生 300円
小学生・中学生 100円
※同一チケットでアレコホール、奈良美智展示室、棟方志功展示室などもご覧いただくことができます。

向井弘「北津軽」(1975)より

芸術文化振興基金助成事業

ローカルカラーは何の色？
—写真家・向井弘とその時代—

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART

向井弘
Mukai Hiroshi

原田メイゴ
Harada Meigo

赤川健太郎
Akagawa Kentaro

塚本義則
Tsukamoto Yoshinori

木村正一
Kimura Shoichi

木村勝憲
Kimura Katsunori

伊藤俊幸
Ito Toshiyuki

秋山亮二
Akiyama Ryoji

柳沢信
Yanagisawa Shin

沼田つよし
Numata Tsuyoshi

小島一郎
Kojima Ichiro

澤田教一
Sawada Kyoichi

『イマージュ・IMAGE'72 NO.2』表紙写真 向井弘

赤川健太郎「ファイル1975〜79」より
（『イマージュ・IMAGE'80 NO. 16』）

秋山亮二「津軽 聊爾先生行状記」（1975-77）より

伊藤俊幸「岩木おろし」（1983-86）より

向井弘「記憶のコレクション」より
《1974年12月 弘前駅前》

原田メイゴ「首長のオフィス」（2000）より《平舘村長》

青森県立美術館 コレクション展 2019-4

What Color is the "Local Color"?
Photographer Mukai Hiroshi and His Contemporaries

ボクたち地方作家のもっているローカル色に対する概念を打ちこわして、ローカル色とは一体なんだろうと考えさせる写真を写していくべきだと思うんだ。固定した概念からはなにも新しく生まれない。自分自身を混沌とした状態に置くことによって新しいものに対する可能性も生まれると思う。
— 向井弘［『イマージュ・IMAGE '73 NO. 4』より］

「image」の面白いのは、写真そのものの表現方法や、一枚一枚の写真に必ずしも在るのではなく、現場主義（報道写真家と称する人たちの云う意味ではなく。）がバックボーンになっているからではないのでしょうか。それは、偶然が必ず必然のなかから現れてくるごとく、メムバアの集りが出来てしまったようにも思えるからです。
— 森山大道［向井弘宛て『イマージュ・IMAGE '74 NO. 9』献本への礼状（1975年2月21日付）より］

向井弘 むかい・ひろし

1931（昭和6）年香川県香川郡香川町（現高松市）に生まれる。1947年リンゴ関係の仕事をきっかけに青森県に入り、49年には大鰐町に移り住む。1955年同町内にカメラ店を開業。1967年近隣に住むアマチュア写真家たちとフォトグループ「ずぐり」を結成し、1971年までメンバーとして活動を続ける。1971年『カメラ毎日』4月号の〈ALBUM71〉に「跡〈松尾鉱山〉」が掲載される。1972年「ずぐり」のメンバーを一部含む仲間とともに写真同人「イマージュ」を結成し、同人誌『イマージュ』を創刊（85年まで全20号を刊行）。1981年「イマージュ」結成10年を記念して東京・新宿のオリンパスギャラリーでイマージュ同人写真展「津軽からのメッセージ」を開催。主な個展に「幻視空間 一津軽・下北一」（1988、スペース・デネガ、弘前）、「弘前城植物園」（1997、スペース・デネガ）、「擬態域 弘前城植物園」（2001、新宿ニコンサロン、東京）がある。県芸術文化振興功労章受賞。2003（平成15）年肺がんにより弘前市内の病院にて死去。

1931（昭和6）年香川県に生まれた向井弘は、戦後に移り住んだ青森県南津軽郡大鰐町で写真店を営む傍ら、1960年代から2000年代にかけて、地元青森を拠点に写真家として活躍しました。向井の活動の主軸となったのは、写真の仲間とともに作った同人誌『イマージュ・IMAGE』（以下『イマージュ』）の発行です。1972年から1985年まで、全20号刊行されたこの同人誌の目的は、当時全国に点在した写真グループや自主ギャラリーがそうであったように、東京を中心とする写真業界や写真雑誌が強いるシステムや価値観から解放された、独自の発表媒体を持つことでした。それは同時に、「ローカルカラー」として「中央」から一方的に押し付けられる地方の写真の固定的なイメージに対する、地方に生きる写真家たちの抵抗であり、また写真の未知の可能性への挑戦でもありました。

「なぜ津軽を撮るとき、小島一郎の『津軽』と、内藤正敏の『婆バクハツ!』の二つのパターンしか写らないのか」、「もう一つの津軽は可能か!」、と『イマージュ』中心メンバーの一人、原田メイゴは問いかけます。

ご遺族のもとに残された向井弘の写真や資料を核としながら、『イマージュ』同人、彼らと交流をもった県外の写真家たち、さらには同郷の巨星、小島一郎や澤田教一の写真も合わせて展示し、青森の写真家たちに引き継がれてゆく問題意識から日本の戦後写真史の一面を照らし出します。

〔トークイベント〕★いずれも入場にはコレクション展チケットが必要です。

会場：青森県立美術館展示室内

■原田メイゴ×向井渉（わたる）
2019年12月21日（土）14：00—［約1時間］

イマージュ同人で、編集の中心を担っていた大鰐町出身の写真家・原田メイゴ氏と、向井弘の次男で写真家の向井渉氏に、向井弘の写真家としての歩みや『イマージュ』の成り立ち、同人たちの目指したものについてお話しをうかがいます。

■伊藤俊幸×沼田つよし
2020年1月13日（月・祝）14：00—［約1時間］

青森市出身の写真家で『イマージュ』第17号から参加し、1980年代以降の多くの向井弘の撮影に同行した伊藤俊幸氏と、青森市出身で晩年の向井と交流を持った写真家の沼田つよし氏に、後半期の向井の写真活動や関心事についてお話しをうかがいます。

● アクセス

- JR新青森駅のルートバスねぶたん号「新青森駅東口」3番バス停から乗車、「県立美術館前」下車（約10分）
- 青森駅の青森市営バス青森駅前6番バス停から三内丸山遺跡行きに乗車、「県立美術館前」下車（約20分）
- 東北縦貫自動車道青森I.C.から車で約5分／（八戸方面から）青森自動車道青森中央I.C.から車で約10分

〒038-0021 青森市安田字近野185
TEL.017-783-3000 FAX.017-783-5244
www.aomori-museum.jp

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART